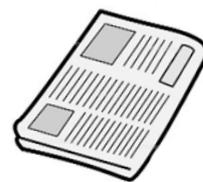


新闻摘要

にゅーすきじ ニュース記事から (2020年6月1日~2020年11月30日)

有关遗华日本人等、中国(库页岛)归国者的新闻

ちゅうごくざんりゅうほうじんとう 中国(サハリン)帰国者関連のニュース



6月1日(星期一): 基于5月25日新型冠状病毒感染症紧急事态宣言(4月7日宣布)被解除, 全国各地的中国归国者支援・交流中心从6月起逐渐恢复了授课。首都圏中心也于6月6日(星期六)开始了授课。



6月4日(星期四): 在东京都内, 各个地方都有记载了曾经迁移到旧满洲(现中国东北部), 后来因战败而客死异乡的人们的悲剧的碑记。原高中教师竹内良男先生(71岁)制作了介绍这些碑记的地图《都内的“满蒙开拓”慰灵碑》。从东京去移居的人口被认为有1万1000人。竹内先生说:



“在人们的印象中, 去移居的都是贫困农家里的二儿子、三儿子, 所以大家也许想不到还会有很多城市里的居民也参加到了移居的行列中。” 比如说, 被称为品川区武藏小山的“小山银座”商店街里放弃经商去移居的就有1000人以上。其背景是因为战争时期粮食等的流通都是被国家统治管理, 商品等等难以确保。

7月3日(星期五): 根据日本萨哈林协会发行的通讯报《海鸥(チャイカ)》, 因为受新型冠状病毒感染症扩大的影响, 航班何时恢复通航尚难以确定, 所以萨哈林遗留日本人的集体暂时回国活动今年全部中止。

7月12日(星期日): 由埼玉县川越市的原短期大学的讲师藤沼敏子女士(67岁)通过对62

6月1日(月): 5月25日に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言(4/7発令)が解除されたことを受け、全国の各中国帰国者支援・交流センターで6月から授業が順次再開された。首都圏センターでは6月6日(土)から授業が始まった。

6月4日(木): かつて旧満洲(現中国東北部)に渡り、敗戦により異郷の地で倒れた人々の悲劇を伝える碑が、東京都内各地にある。それらを紹介する地図「都内にある『満蒙開拓』慰霊碑」を、元高校教員の竹内良男さん(71)が製作した。東京からは1万1千人が移住したとされ、竹内さんは、「貧しい農家の次男、三男が渡ったイメージがありますが、都市住民も多数参加したのです」と話している。たとえば、品川区・武蔵小山の「小山銀座」商店街では1千人以上が商売をやめて移住したが、その背景には、戦時下で食糧などの流通を国が統制しており、商品などが確保できなくなったということがあったという。

7月3日(金): 日本サハリン協会発行の通信紙『チャイカ』によれば、新型コロナウイルス感染拡大の影響で航路再開の目途が立たず、サハリン残留日本人の集団一時帰国が今年はずべて中止となった。

7月12日(日): 埼玉県川越市の元短大講師・藤沼敏子さん(67)が、残留孤児62人に対するインタビューをまとめた証言集『あの戦争さえなかったら 62人の中国残留孤児たち』(津成書院)上下巻を出版した。2019年に出版した残留婦人の証言集に続く第2弾



位遺華孤児の采访而整理出的证言集《如果没有那场战争,就不会…… 62 位中国遗留孤儿》(津成书院)上下卷出版了。这是紧接着 2019 年出版的遗留妇女们的证言集后的第二弹。藤沼女士说:“绝不能让这些人的生就像没有过一样。也希望年轻人能知道现在的历史是建立在这样的悲剧之上的。”

7 月 25 日(星期六):纪录片《日本人遗忘了的——遗留在菲律宾和中国的日本人》于 7 月 25 日在东京中野的“ポレポレ东中野”公开上映。以此为开端,这部纪录片开始了全国范围内的公映。这次公映的策划、制作者是非营利法人菲律宾日裔法律支援中心的代表理事河合弘之先生。作为一名律师,河合先生一直致力于帮助遗华孤儿、菲律宾遗留日本人的第二代获取日本国籍的支援活动。

9 月 5 日(星期六):“加深对遗华日本人等的理解的集会 在东京—你知道身边的“归国者”吗?”于 9 月 5 日在东京代代木的国立奥林匹克纪念青年综合中心举行(主办单位:首都圏中国归国者支援・交流中心)。参加者的年龄从 10 几岁到 80 多岁,大约 90 名的听众聆听了经过三年的培训、这天初次登台亮相的“战后世代的讲述人”的演讲。讲述人们代替年事已高的当事者来讲述他们苦难的人生经历。

9 月 6 日(星期日):从 1998 年开始,以生活在京都市伏见区的小栗栖地区的中国归国者(遗华孤儿)及其家人为对象开办的小栗栖日本語教室于今年 3 月落下了 21 年的活动历史的帷幕。战争结束后,被遗留在旧满洲,80 年代到 90 年代终于能够踏上了祖国土地的第一代,来这里学习日语,并成为归国者社区的中坚力量。而第一代的高龄化却使教室的运营变得困难起来。



9 月 18 日(星期五):在太平洋战争战败的混乱中,被留置在中国大陆,在大约 40 年的岁月里,隐藏自己日本人的身份、坚强地挣扎着活下来的原遗留孤儿石川千代女士(86 岁),现居住在高知市。石川女士将自己动荡的一生写

だ。藤沼さんは、「この人たちの人生をなかったことにすることは絶対にできない。若い人にも、悲劇の上に今の歴史が続いていることを知ってほしい」と話している。

7 月 25 日(土):ドキュメンタリー映画『日本人の忘れもの フィリピンと中国の残留邦人』が 7 月 25 日、東京・中野の「ポレポレ 東中野」で一般公開され、これを皮切りに全国公開がスタートした。企画・製作したのは、NPO 法人フィリピン日系人リーガルサポートセンター代表理事の河合弘之さん。河合さんは弁護士として、中国残留孤児やフィリピン残留日本人 2 世の日本国籍取得支援に取り組んできた。

9 月 5 日(土):「中国残留邦人等への理解を深める集い in 東京～あなたのとりにいる帰国者のこと知っていますか?～」が 9 月 5 日、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された(主催:首都圏中国帰国者支援・交流センター)。3 年間の研修を経てこの日デビューを果たした「戦後世代の語り部」たちの講話に、10 代から 80 代まで約 90 名の聴衆が耳を傾けた。語り部たちは高齢になった当事者に代わり、苦難の人生を語った。

9 月 6 日(日):京都市伏見区の小栗栖地域に暮らす中国帰国者(中国残留孤児)やその家族を対象に 1998 年から続けられてきた小栗栖日本語教室が今年 3 月、21 年間の活動の歴史に幕を下ろした。戦後、旧満洲に置き去りにされ、80～90 年代によく祖国の土を踏むことができた一世達が日本語を学び、帰国者コミュニティーの核になっていたが、一世の高齢化で教室運営が困難になった。



9 月 18 日(金):太平洋戦争の敗戦の混乱で中国大陸に取り残され、約 40 年にわたって日本人であることを隠して生き抜いた元残留孤児、石川千代さん(86) = 高知市在住 = が、その激動の人生を一冊の本にま

成一本书并将此书出版，书名为《生命 我的战后 中国和日本》（リーブル出版社）。据说石川女士 50 岁的时候返回日本，是用拼命学到的日语写下了这本书。她说“我的书是日本社会的记录。很希望年轻人能读一读。”

9 月 30 日（星期三）：南日本新闻《证言 继续讲述战争》中登载了遗华孤儿花田美智子女士的证词。花田女士（82 岁）居住在鹿儿岛市郡山町，1988 年与父亲一起进京，在中国遗留孤儿访日团中寻找妹妹武子。在战争结束后期盼了 43 年，终于盼到了久别重逢。面对着来自山东省的张凤香，父亲果断地说“她一定是我的女儿”。10 天之后，她们收到了“99%的姐妹”的血液鉴定结果。

10 月 8 日（星期四）：因描写遗华日本人的纪实文学作品《没有终结的旅程》，而于 1986 年获得大佛次郎奖的直木奖作家井出孙六（89 岁）先生，因败血症于 8 日过世。

10 月 11 日（星期日）：NHK 的电视节目“目击！日本”介绍了为了帮助遗华日本人而于三年前设立的护理设施“1”（东京都内）以及那里的利用者的状况（《离故乡还很遥远～“遗华孤儿”生活过来的 75 年～》）。据说，在由于新型冠状病毒感染扩大，用户减少利用“1”服务的趋势有所增加的 6 月，有位利用者因过去的战争所带来的精神创伤又被触及，不管白天还是晚上都会打电话来咨询。这档节目，作为报道文章被刊载在 NHK 的新闻网页中。

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201106/k10012697131000.html> (H)

◆请注意：本栏目的新闻为见诸报端的报道摘要，并非政府正式公布的内容，其中一部分还包含媒体的观察消息。



とめ、『命 私 の戦後、中国と日本』（リーブル出版）を出版した。石川さんは 50 歳のときに日本に帰り、必死で勉強した日本語でこの本を書いたという。「私の本は日本の社会の記録。若い人に読んでほしい」と話している。

9 月 30 日（水）：南日本新聞「証言 語り継ぐ戦争」に残留孤儿・花田美智子さんの証言が掲載された。花田さん(82)は鹿児島市郡山町在住で、1988 年、父とともに上京し、中国残留孤儿访日团の中から妹・武子さんを探し当て、戦後 43 年間待ち望んだ再会を果たした。山东省の張鳳香さんの前で父が「私の娘です」と断言し、10 日後には「99 % 姉妹」という血液鑑定結果が届いたという。

10 月 8 日（木）：中国残留孤儿を描いたノンフィクション「終わりなき旅」で 1986 年に大仏次郎賞を受賞した直木賞作家の井出孫六さん（89）が 8 日、敗血症のため死去した。

10 月 11 日（日）：中国残留孤儿だった人々を支えようと 3 年前に設立された東京都内の介護施設「1」と、そこに通う利用者たちの様子が、NHK テレビ番組「目撃！にっぽん」で紹介された（「ふるさとはまだ遠く～“中国残留孤儿”が生きた 75 年～」）。この介護施設では、新型コロナウイルス感染拡大で利用を控える人が増えていた今年 6 月、戦争によるトラウマが甦ったという利用者から、昼夜を問わず相談の電話が寄せられていたという。番組は、NHK のニュースサイトに記事としても掲載されている。

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201106/k10012697131000.html> (H)

◆ご注意：本欄は、一般の新聞などで報道された記事を要約して掲載しています。したがって、政府が公式に発表したものではなく、一部には報道機関の観測記事なども含まれています。

